

令和 2 年度 自 己 評 価 表

鳥取県立皆生養護学校皆浜分校

中長期目標 (学校ビジョン)	学び 輝き 感動のある学校 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、よりよく生きることができるようにする学校 《 1 8 歳で自立できる人を育てる ～将来を見とおした今のＱＯＬの向上～ 》	今年度の重点目標	1 幼児・児童・生徒一人一人が「生き生きと学ぶ」教育に努める。 2 安心できる保健、給食体制を築く。 3 開かれた学校を推進する。 4 キャリア教育や地域支援の充実に努める。
-------------------	--	----------	--

年 度 当 初						評 価 結 果 (9) 月		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
一人一人が「生き生きと学ぶ」教育の充実	小学部	自己理解に基づく心の安定と健康回復への意欲を育てる指導と支援の充実	○自分の心身の状態について、次第に客観視できるようになり、言葉で訴える力もついてきた。不調な時の対処法を考えることができはじめている。 ○学習に集中できる時間が短く、緊張度の高い場面では、強い疲労感を訴えるため、学習内容や量、時間などを柔軟に調整する必要がある。	○病気や特性についての自己理解が進み、自分に合った方法で不安を軽減しながら、心理的に安定して過ごすことができている。 ○学校生活において充実感や達成感を得ながら、将来に希望をもち、生き生きと学んでいることが、年2回のアンケートで確認できる。	○医師の指示の下、緊張や不安の程度、過敏性や疲労度に応じて学習内容の変更や調整を行う。 ○「わかる授業」を第一に、授業改善する。 ○自立活動での「自分の取り扱い説明書」づくりを通して、病気や特性への理解を深め、自己管理する力がつくように支援する。 ○適切な学びの場が選べるように、卒業後の就学先について児童と保護者に十分な情報提供を行う。	○医師の指示の下、学習時間を調整し、休息を十分に取って不安や疲労の軽減を図った。不調の波はあるものの終日学校で過ごせるようになっている。 ○「自分の取扱説明書」づくりなどを通して不調の原因に気づき、自分で対処できるようになってきた。不調になっても比較的短時間で回復するようになっている。 ○卒業後の就学先について、学校見学や説明会、体験学習の機会を設定し、具体的なイメージがもてるようにした。	B	○学習時間や内容への配慮だけでなく、気温や湿度、季節的な気持ちの落ち込みにも注意し、保護者との連携を密にして体調を大きく崩すことがないようにする。 ○引き続き、自立活動の時間を中心に、病気や特性への理解を深め、不調になる前に予防策を講じることができるようにする。 ○卒業後に向けて、自分の状態を他者に説明することや学校での生活時間を意識することなど、中学生としての生活に必要な力が身につくよう支援する。
	中学部	自己理解に基づく心の安定と進路決定に向けての意欲を高める支援の充実	○様々な取り組みをスモールステップでやり遂げることで、自分に対して自信が持てるようになってきている。 ○ストレス緩和が苦手で、不得意なことに対して自分に合わせて取り組むことが十分にできていない。	○将来に向けて、自己の課題を認識した上で進路選択ができ、自分に合った方法で苦手なことにも取り組めるようになっていることが、年2回のアンケートで確認できる。	○「自分の取り扱い説明書」づくりを通して自己理解を深め、客観的に自分が見られるようにする。 ○教職員が個々の進路に対する課題を把握して高校調べや高校体験などの学習を進める。 ○本人、保護者、教職員が毎日の連絡を通して体調や学習の状況を共有し、個に応じた学習指導や進路指導に努める。	○「自分メーター(自分に関する6つの項目を5段階評価し視覚化)」や「自分の取扱説明書」づくりを通して自分を客観的に捉えたり自己理解を深めたりし、それぞれの目標に向けて学校生活を送っている。 ○進路希望調査の結果をもとに進路相談をし、自分に合った選択ができるように高校見学を勧めたり、家庭学習の定着を図ったりする取り組みをした。	B	○これまでの取り組みを継続し、提案と交渉によって実現可能な目標を設定して成功体験を積み重ねていくようにしていく。 ○「自分の取扱説明書」づくりを進め、自分に合ったストレスの解消法を複数見つけられるようにする。また、学期ごとに取り組んでいる「自分メーター」で、自分の成長や課題をとらえ、カウンセリングや面談を通して自分の課題の克服に向けて段階的に支援していく。
ニーズに対応できる専門性の向上	研究部	生きる力に結びつく進路指導と授業改善の推進	○ICTを用いた本校との交流や連携を通し、機器の使い方を習得して授業に活用することで、児童生徒がより深い学びを体験できるようにする。 ○全員が卒業学年であり、昨年以上に児童生徒の進路指導に結びつくような専門性の高まる研修を持つ必要がある。 ○皆浜分校の一員としての自尊感情を高める学習を進めている。	○定期的かつ計画的に設定された教職員の研修・研究が、ICTの活用も含めた授業改善や、本校との交流等に活かされ、分校児童生徒全員が自分の将来を見通した進路保障・進路選択ができている。	○月1回を目安に、教育相談や病気、障がいの特性についての研修を工夫し、教職員の専門性をより向上させて、進路指導に活かす。 ○本校、医療、スクールカウンセラー等と連携して、進路決定だけでなく、その先までを見据えた適切な進路指導を行う。 ○進学や受験対応を考慮した、確かな学力を身につけるための授業改善を行う。	○進路指導について、心身症の特性を踏まえた普遍性のある研修までは至っていないが、高校進学など具体的な進路に向けての職員研修は進めることができている。 ○皆浜分校の一員としての自尊感情を高める学習については、昨年度の取り組みを継続し、一層工夫した取り組みが必要である。 ○ICT活用は本校の協力もあり進んでいるが、個々の教職員の活用スキルを向上させる研修については更に工夫が必要である。	C	○結論を求める研修ではなく、意見交換の中で自らの考えを深めたり、他者の意見を参考にしたりするような研修を企画実践していく。 ○コロナ禍で、外部の研修会が激減する中にあっても、自主的に研修の機会を設定し取り組むような、受け身でない積極的な姿勢を教職員が養うようにする。
	支援部	将来を見据えた教育相談と進路指導の充実	○児童生徒の実態に応じ、日々のきめ細かな配慮はできているが、将来の生きる力(自立)につながる教育相談、進路指導の弱さがある。 ○児童生徒の実態(心身症)から、学校外での体験活動を通して、一人ひとりが自分の将来を見通すことができる進路指導に難しさがある。	○児童生徒が個々の病気を自己理解し、進んで改善、克服しようと努力している。 ○児童生徒が個々のキャリアパスポートを作成することにより、将来の夢と希望を持ち自分の生き方を考えている。 ○児童生徒や保護者が、支援を受けているという安心感を年2回のアンケートで確認できる。	○自立活動の指導、個別の指導計画、個別の教育支援計画及びキャリアパスポートを活用し、全教職員が共通理解を図りながら指導する。 ○医療、スクールカウンセラー等と連携して継続的な支援を行い、卒業後を見据えた適切な指導を行う。	○小学部児童は、自立活動の学習を通して、苦手な事を自分なりの方法で改善、克服しようとする姿が見られようになった。中学部の生徒も自己理解を深めながら目標に向かって取り組む姿勢が見られるようになった。 ○キャリアパスポートを作成し、児童、生徒同士が互いに評価し合うことにより、自分の良さに気づき、将来像を描けるようになってきた。 ○児童生徒、保護者共に学校を信頼し安心感をもって学校生活を送っている。	C	○今までどおり、自立活動の学習を中心とした児童生徒個々の実態に応じた指導に努める。また、互いに肯定的な評価をし合うことにより児童生徒同士の関わりを深め、自己肯定感を高めていけるよう指導する。 ○「卒業生と語る会」で先輩の話を聞くことにより、卒業後の具体的なイメージを持てるようにする。 ○卒業が近づくにつれて、不安感が高まることが予想されるので、今まで以上に医療、スクールカウンセラーとの連携を密にした指導に心がける。

学 校 と 生 活 に お 確 け る 健	健 康 安 全 部	○安心して登校で きる環境作りと 個々の心身の状況 に応じた支援の充 実	○緊張の連続、疲れ、不安などから学 校や学習や行事などに向かえない児童 生徒がいる。 ○生活リズムが定着しない生徒があり 朝の登校に間に合わなかったり遅刻・ 欠席となることがある。	○児童生徒が卒業後の自分をイメージ し、社会の中で生きていくために、病 状から来る困難さを軽減し生活を整え ようとしていることが、教育相談や懇 談で確認できる。	○心身の状態を把握する健康観察や情報収集 に努め、各学部、支援部、外部機関とも連携 して生活・学習の面でも個々に応じた指導支 援をしていく。 ○保護者や関係機関と連絡を密に取りながら、 児童生徒が自分の病状の理解を深めるととも に、病状から来る困難さを自分に合った方法 で軽減しながら学校で過ごせるように支援し ていく。	○家族の協力を得て、登校時間を調節しなが ら休まず登校しようとしている。 ○自立活動の取り組みや日々の活動から教師 の児童生徒理解が深まり、児童生徒にとって 相談しやすい雰囲気心を心がけている。児童生 徒と教師が話し合いをしながら児童生徒が自 分を見つめる機会が増え、教職員間の連携を はかって適切なアドバイスをしようとしてい る。	B	○今後も本人、保護者、医療、SC等とつな がりながらストレスを軽減し、生活や学習に前 向きに取り組めるよう個々に応じた支援をし ていく。 ○スモールステップで成長していることを褒 め、自己理解を深めるようにし、進路への不 安を軽減しながら前に進む意欲が持てるよう に支援する。 ○将来に向けて自分の病状の理解を深め、他 者に理解してもらえるように説明することが
---	-----------------------	--	---	--	--	--	---	---

評価基準 A：十分達成〔100～80%〕 B：概ね達成〔80～60%程度〕 C：変化の兆し〔60～40%程度〕 D：まだ不十分〔40～30%程度〕 E：目標・方策の見直し〔30%以下〕